

ロシアがウクライナに侵攻を始めて、四カ月になろうとしている。国内外のテレビ局は積極的に戦況を伝え、国際社会が難民に手を差し伸べるきつかけにもなっている。そんな中、気になるのが交流サイト(SNS)に流れる緊迫感あふれる戦場や凄惨な被災地からの生々しい映像だ。誰もがスマートフォンを持ち、どこからでも瞬時に世界に向けて情報発信できる時代ならではといえるだろう。スマホが戦争報道を大きく変えている。

撮影しているのは決定的な瞬間に遭遇した市民や兵士。映像制作のアマチュアだ。日本のテレビ各局も現地取材しているが、爆音がとどろき、死と隣り合わせの最前線の映像や情報はSNSに頼らざるを得ない。SNSには故意に流される偽情報も紛れ、根拠のないうわさもまことしやかに伝えられる。ファクトチェックに手間と時間がかかるが、現場のリアルな映像の訴求力は極めて高い。

二〇一九年秋、筆者が審査員を務めた山形国際ドキュメンタ

ネット時代のテレビメディア

竹林 紀雄



5日、ウクライナ・キーウで、ミサイル攻撃を受けて上がる煙＝ロイター・共同

スマホが変える戦争報道

り着くまでの約五千六百キロの旅を三台のスマホで記録した。持ち主の体の一部になっっているスマホだけに、その映像から家族一人一人のリアルな心情が伝わってくる。スマホのカメラ機能の高性能化もあって、表現力の高い映像だった。

ニュース映像に話を戻そう。放送時間が限られたテレビ番組の宿命として映像の切り張り、つまりは編集が必要だ。それが自局クルーが撮影したもので、SNSに投稿されたものでも、つなげると撮影時の時空間を超えて、新しい連続した時空

そつだらうか。複数のカメラで同時に撮影しない限り、それをとらえることはできないし、一台のカメラでは発砲と着弾の瞬間を撮影できないからだ。

今から百年前の一九二二年、旧ソ連の映画監督で映像理論家のレフ・クレシヨフが、同じ映像でも別の映像とのつなぎ方で受け止め方が変わることを実証した。例えば同じ表情の顔の映像でも、その前に湯気が立つスーパの映像があれば、その顔から空腹を感じ、子どもの遺体の映像があれば悲しみを感じる。後にモンタージュ理論につながる「クレシヨフ効果」である。

この効果で生じる認知バイアスを使えばプロパガンダが可能である。古くは、旧ソ連やナチス・ドイツは、切り張りした映像で国民世論を誘導した。

本来、ノンフィクションの映像を撮るには、取材者が現場に立つことが何より大事だ。自ら見て、肌で感じて伝えることが基本である。しかし戦争では、それが難しい。だから他者のSNSの映像を活用する。しかも、ネット時代の戦争は銃弾が飛び交う戦場のみならずサイバー空間でも戦闘が展開される。さらには、認知バイアスを利用したプロパガンダ映像がネットに流れる。

そんな難題に直面しながら、テレビメディアはどのように戦争を伝えようとしているのか。今は走りながら考えるしかないが、検証は不可欠だ。

(たけばやし・のりお)映像作家、文教大学院教授

リー映画祭で撮影機材としてのスマホの可能性を感じさせる作品と出合った。インターナショナル・コンペティション部門で優秀賞に輝いたハッサン・ファジリ監督の「ミッドナイト・ト

ラベラー」。まだ米軍が駐留していたアフガニスタンでタリバンから「死刑宣告」を受けた同監督は命からがら、一家で国外脱出を図る。そして三年かけてハンガリーの難民収容所にたど

間を生み出す。例えば、ある戦車が発砲するカットにある建物が爆破されるカットをつなげたとする。それを見れば、戦車が建物を爆破したと認識するだろう。しかし、